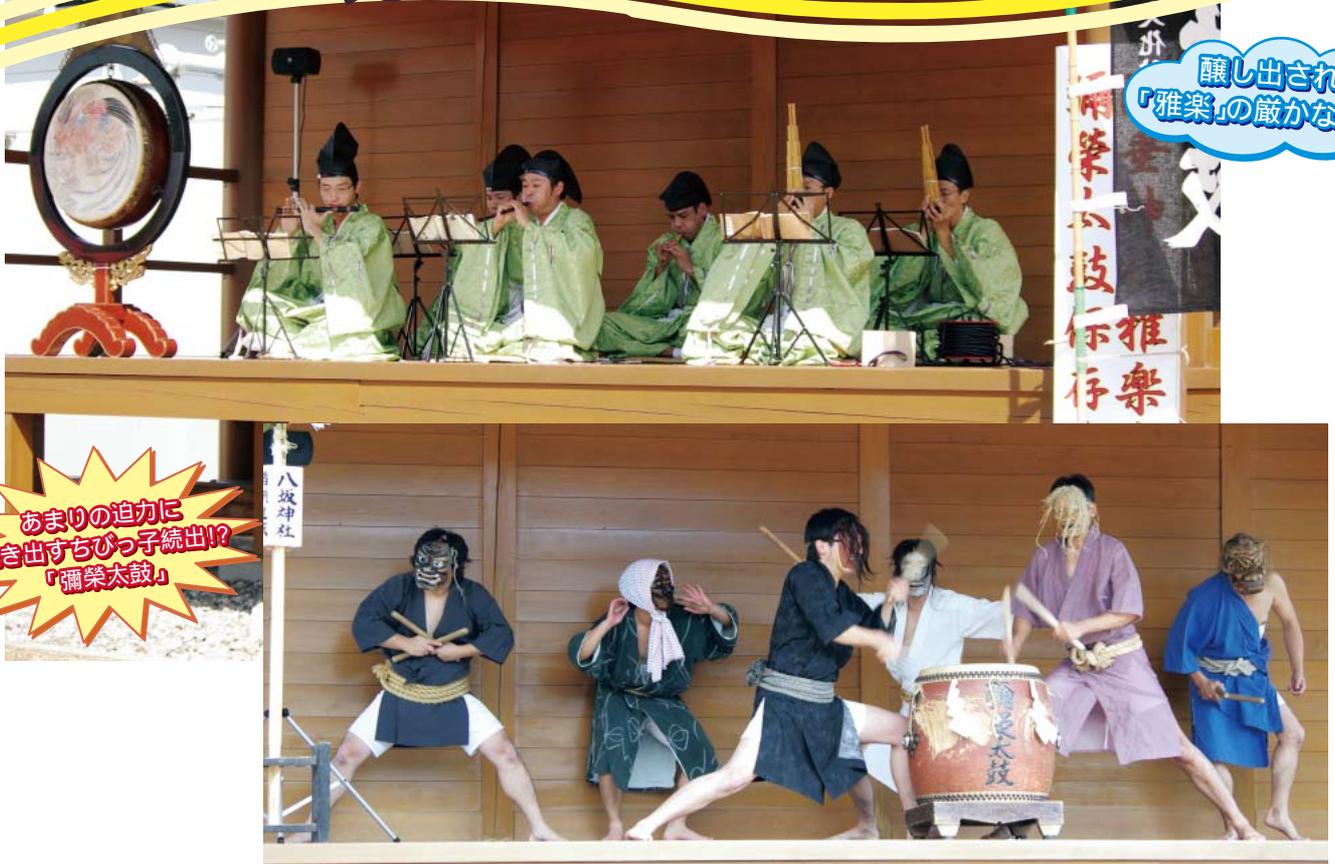


No.28
2007.12.20

いしかわの遺跡

古代「祭・食」体験まつり



醸し出される
「雅楽」の厳かな雰囲気

あまりの迫力に
泣き出すちびっ子続出!
『彌樂太鼓』

『古代「祭・食」体験まつり』が、平成19年10月13日(土)・14日(日)の二日間にわたって、埋蔵文化財センター古代体験ひろば及び本館を会場として開催されました。

まつりの初日には、野外ステージにおいて、能登町の酒垂(さかたる)神社雅楽会と彌樂(いやさか)太鼓保存会による演奏が行われ、来場者の皆さんには、雅楽の趣深いあるいは太鼓の迫力ある演奏に惹き込まれつつ、“まつりの雰囲気”を楽しんでいただけたのではないのでしょうか。

財団法人 石川県埋蔵文化財センター
Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp
ホームページ http://www.ishikawa-maibun.or.jp/

古代体験

古代体験まつり

まつり2日目の10月14日(日) ステージで「チマキづくりレース」が行われました。まつりのもう一つのテーマ「食」に関する体験には、クルミ試食や縄文鍋などがありますが、「いしかわ」ならではの「チマキづくり」です(いしかわの遺跡 26参照)。今回はそれをレースにしてしまいましたが、みなさん手際良くかなりの数を作っていました。数と仕上がりなどを決め手に審査の結果、地元小学校6年生チームが優勝しました。記念に特製まが玉と古代米、復元弥生土器のセットを獲得し、さらなる修練を誓って(?) いました。



ステージでのチマキづくりレース



親子協力してのチマキづくり



優勝した地元6年生チーム

このほか、定番・人気の「古代衣装試着」や「収穫・脱穀体験」をはじめ、来場者が思い思いに古代のわさやくらしにふれ、秋晴れの下、コーナーのあちらこちらで笑顔がこぼれ歓声があがりました。



「バッチリね！」



「よいしょっ よいしょっ」



「手形・足形」もお披露目

平成19年度 古代体験学習講座「まつりの土器づくり」

今年の講座は「まつりの土器づくり」と題して、9月23日(日)に“土器づくり”、古代体験まつりの初日に“土器野焼き”を行いました。



体験まつりでの土器野焼き

縄文土器の中でも装飾性の高い深鉢をモデルに、参加者それぞれの個性あふれる作品ができ上がり、まつりの炎の中で完成となりました。



土器づくり

粘土をこね、形を作り、紋様を入れ、焼くといった一連の作業すべてが「まつり」で、さらに、その土器を使って特別な「まつり」がある様な感じがしました。

環日本海文化交流史調査研究集会

平成19年10月26日(金)に、環日本海文化交流史調査研究集会を開催しました。今回のテーマは、「日本海域における古代の祭祀 - 木製祭祀具を中心として - 」です。

ご存知の人も多いと思いますが、平成14～16年にかけて当センターで調査した七尾市小島西遺跡で、奈良時代から平安時代の木で作られたマツリの道具(木製祭祀具)が大量に出土したことは記憶に新しいと思います。今年度、この遺跡の発掘調査報告書の刊行が予定されているので、今回の研究集会の成果が報告書に反映できれば、という期待を込めて企画しました。当然、石川県の発表者は調査担当の大西顕さんです。

奈良時代や平安時代の祭祀は、^{りつりょう}律令の規定がある一方で、地域独自のマツリの体系もまたあったようです。小島西遺跡の祭祀がどのような背景を持っていたか、つまり京師の祭祀を踏襲しているのかそれとも地域的特色があるか。前者ならば中央の政府による祭祀の関与が推測されるのに対し、後者ならば地方豪族の元気な活動を知ることができるでしょう。

九州から東北地方までの地域の動向を8名の方にご報告をお願いしました。今回の特色は、東北地方を^{よねしろがわ}米代川を境にして2名の方をお願いしたことです。それより南が^{じょうさく}城柵のある律令政府の支配が拠点に及んでいる地域、北側がそれほど及んでいない地域という対照的なので、木製祭祀具にどのような違いが認められるか非常に興味がありました。

そして、各地域の木製祭祀具にバリエーションが存在していることが確認されたことは、大きな成果でした。また、「祭祀」の意味を「マツリ」と「ハラエ」を区別しないで用いていることや、おこなう「場」の意味づけなど、さまざまな問題点もまた明らかにすることができました。マツリの人間行動がさまざまな人の心のあらわれであるのは確実なのですが、考古学的にどのようにそれを掌握できるか。実は、一番難しい分析作業なので、小島西遺跡の発掘調査報告書が楽しみです。

27日(土)に資料検討会を行い、小島西遺跡、かほく市指江B遺跡をはじめ、金沢市埋蔵文化財センターのご協力によって福増カワラケダ遺跡などから、他地域との違いを議論しました。



研究集会会場の様子



討論で熱弁する大西さん



会場からも、鋭い質問がありました。



資料検討会の1コマ

平成19年度
発掘調査から

松山D遺跡

松山D遺跡は加賀市北東部を北流する動橋川右岸に立地し、国道8号の松山交差点の近くに位置します。周辺の遺跡では、遺跡南東部の丘陵に所在する松山古墳群・松山城跡・松山焼窯跡や、「米」と書かれた多量の墨書土器が出土した松山C遺跡などが知られています。今回の調査は国道8号の加賀拡幅事業に伴うもので、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の遺構・遺物を確認しました。



遺跡完掘状況(南西から)



円墳(周溝)検出状況(北から)



弥生土器出土状況



須恵器出土状況

弥生時代の遺構としては、掘立柱建物・土坑・溝を検出しました。掘立柱建物は10棟程度確認しており、1間×1間や1間×2間の規模のものを主体としています。土坑や溝からは土器がまとめて出土しました。

古墳時代の遺構としては、円墳を2基検出しました。円墳の主体部は削平されており、周溝のみが残っていました。規模はいずれも径16mほどで、6世紀後半から7世紀前半にかけての須恵器が出土しました。また、円墳から20m離れた地点で須恵質の円筒埴輪片が2点出土しています。

平安時代の遺構としては、掘立柱建物・土坑・溝を検出しました。掘立柱建物は2間×5間の規模を1棟確認しています。土坑からは須恵器や土師器が出土しました。

中世の遺構としては溝を検出しました。この溝の西側には規則的な杭列の痕跡が確認でき、加工した杭や割られた石が一か所にまとめて廃棄されていました。

以上のことから、動橋川右岸において弥生時代から中世にかけて連続して遺跡が形成されていたことが明らかとなり、地形の高い所から低い所へと遺跡が広がっていく状況を確認できました。

元菊町遺跡

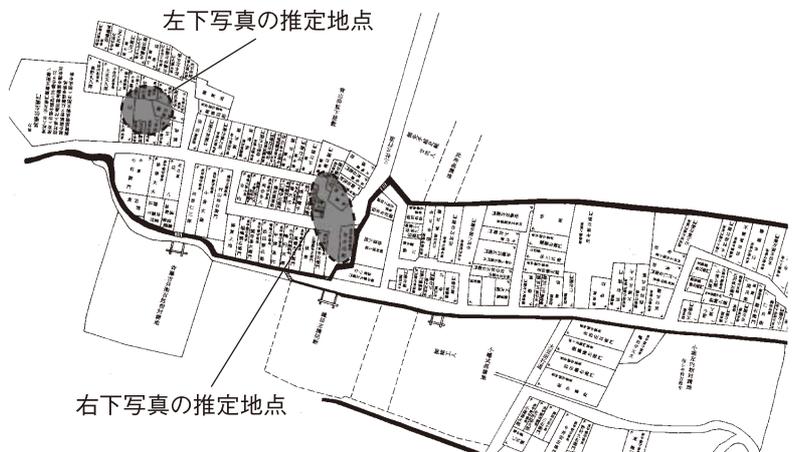
もとぎくちょう
元菊町遺跡は金沢市の市街地北西部に位置します。昭和62(1987)年に元菊町地内で発見されたことからこの遺跡名となりましたが、遺跡は町域の外にも広がっており、今回の発掘調査はさんじや三社町地内で行われました。北陸新幹線の建設工事に伴い、JR北陸本線の南側に接する地点を発掘したものです。

発掘調査では江戸時代の道路、井戸、水路などが発見されました。道路については、その位置や方向が江戸時代の絵図に描かれた道路とほぼ一致しました。また、石敷、石列、石組溝など石を使った遺構が多く、庭地、塀、敷地境など屋敷地の一部と推定されます。大量に出土した陶磁器は18世紀後半以降、つまり江戸時代でも後半のものが中心となっています。

絵図によると、調査地付近は江戸時代前半は百姓地として田畑が広がっていたようですが、後半には家屋敷が立ち並んで金沢城下町の一部となっています。そうした変化は今回の発掘調査により裏付けられますが、絵図とは一致しない部分も多く、絵図に歪みや誇張があることが具体的に示されています。このように、ごく一部分ではありますが、金沢城下町の実態を知ることができました。



調査区南西部分の全景



文化8(1811)年の絵図

石川県立埋蔵文化財センター『元菊町遺跡』平成2(1990)年 から



敷地境と庭地(石が多く使われている)



道路(交差点になっている)

古代
体験

「青銅祭器づくり」・「復元 古代祭器」



今年の埋文センターは、古代の「祭・食」をテーマにイベントや講座を実施しています。その一つとして、「古代体験まつり」と「体験講座」では、鏡・剣の製作体験などを行いました。まつり初日(10月13日)は、コーナーを設け、復元した青銅器に直にふれてもらい、石膏を原材料に石製鋳型を模したシリコン製の鋳型で模擬鋳造体験を行いました。当日は天候にも恵まれ、大変盛況でした(上:体験作品・下:まつりでの体験の様子)。



11月18日(日)には、本格的に金属を溶かして鏡と剣を製作する古代「祭・食」体験講座「復元 古代祭器」を開催しました。人と金属とのかかわりや鋳造技術の歴史についてふれた後、当日の参加者13人が2種類の鋳造方法を体験しました。はじめは、シリコン製の両面鋳型で鏡の鋳造です。鋳型に離型剤をぬり、型を合わせます。その後、鍋で金属を溶かし - 金属が溶け液体になる際の皆さんの驚きが印象的です - 、鋳型に流し込みます(1)。金属が冷えたら型を開け、鋳あがった鏡を外します(2)。



次に、鋳物砂を使った剣の鋳造に挑戦しました。原型のセットされた型に離型剤をぬり(3)、鋳物砂を入れてつき固めます(4)。つき固め終わったら原型をはずし、型をあわせしっかり留め、溶けた金属を鋳型に流しこみます(5)。金属が冷え固まったら型を開き、鋳あがった剣を型からはずし、くっついた鋳物砂を洗い流します(参加者の皆さんは、砂のつき固めに汗を流しました)。

午後は、鋳あがった鏡・剣の研磨作業を行いました。砥石でバリを落とした後、耐水ペーパーで磨きます(6)。作業が進むにつれ輝いていく作品に、皆さんの興奮も増し、最後、秘密兵器(金属研磨剤)で仕上げられた鏡に、皆さんの満足された表情をみる事ができました(次ページ左:体験講座製作作品)。

収蔵品ギャラリー

当センターが保管している数多くの出土品の中から、選りすぐりの「収蔵品」をご紹介します。今回のテーマは「青銅祭器」です。

収蔵品No.12・13 銅剣・小銅鐸 - 金沢市 藤江B遺跡 -

写真右上は銅剣(長さ9.8cm)、同下は小銅鐸(高さ6.2cm)で、いずれも、金沢市藤江B遺跡から、平成7年(1995:小銅鐸)と8年(1996:銅剣)に出土した青銅製の鑄造品です。

日本列島に青銅器が登場するのは弥生時代のことであり、朝鮮半島を通じて大陸から伝わったと考えられます。彼の地では実用品であった青銅器も、日本においては次第に祭りの道具へと変化していきますが、その分布の中心は、北部九州、近畿あるいは山陰など西日本諸地域にあり、石川県での出土例は、銅剣・小銅鐸とも本品のみで、これらが現在、日本海側では最北の事例となっています。

欠損があり(完形品ではなく)、鑄込みや遺存状態も良好とはいえませんが、これらをもとにした鑄造体験(前ページ)では、写真左(剣・鏡)のような復元品ができあがります。失われていたかつての輝きを目にすることができるのも、これら地下に埋もれていた出土品があればこそ、その輝きの中に、当時のわざやそれらを用いたまつりの風景が偲ばれます。



体験講座製作作品

体験用復元品

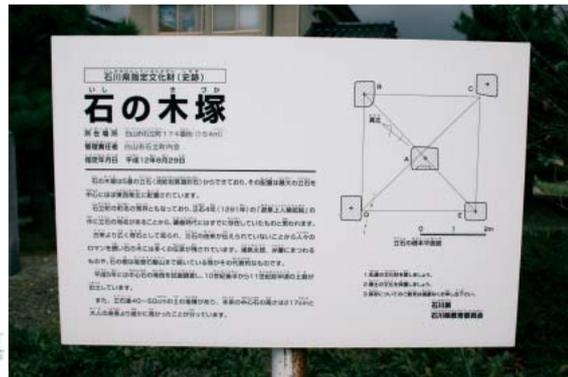
訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

県指定史跡 いし きづか 石の木塚

石の木塚は、手取川扇状地の扇端部、白山市石立町に所在しています。塚は5基の四角柱状に加工された凝灰岩の立石により構成され、最大の立石を中心にほぼ東西南北に配置されています。町名の由来ともなっており、正応4(1291)年の『遊行上人縁起絵』に「石立」の名があることから、この頃には既に存在していたと考えられます。

石の木塚は、その性格については不明とされながらも、古来より広く奇石として知られ、浦島太郎や武蔵坊弁慶にまつわるものや、石の根が能登石動山(せきどうさん)まで続いている等多くの説話や信仰の対象となりながら、現在まで変わらぬ姿で保存され続けている貴重な遺跡として高く評価されています。

平成5(1993)年に中心石の南西の試掘調査が実施されており、10世紀後半～11世紀前半の土器が出土しています。また、造立後40～50cmの土の堆積があり、本来の中心石の高さは217cmもあったことがわかりました。立石が10世紀代に造立されたとすれば、水陸交通の要衝であった「比楽駅(ひらかえき)」、加賀の国津「比楽湊(ひらかみなと)」に近接して存在した古代交通路関連の遺跡であった可能性が高いと考えられているものです。



所在地：白山市石立町174
交通：JR北陸本線加賀笠間駅より車で6分
お問い合わせ：白山市教育委員会文化課
 電話 076-274-9573